

笠木透さんが2014年に77歳で亡くなってから4年。笠木透メモリアルCDブック『歌がなくては人間らしく生きてはいけない』が出版されました。雑花塾のメンバーで笠木さんと活動を共にし、この本の執筆者の一人でもある増田さんに、歌もふんだんに交えて語っていただきました。

増田さんの話は、『海に向かって立っている』『私に人生と言えるものがあるなら』『私の子どもたちへ』の歌とともに始まりました。『私の子どもたちへ』は、笠木さんがピート・シーガーに影響されて初めて作った歌です。参加者も自然に声を合わせて歌いました。次は郡上から岐阜市までの長良川を自然豊かに描いた横に長〜い絵本。全部伸ばし、それをぐるりと参加者で持って、素敵な絵と歌『長良川』を楽しみました。

岩村町で生まれ、岩村高校時代に、民青に入って「うたごえ」に触れたこと、岩村から岐阜への電車の中で署名活動をしたことなど、雑花塾であちこちへ移動する車の中で、増田さんは笠木さんからたくさんのことを聞きました。「それぞれの心に絵が浮かぶような歌が大切である」は、笠木さんの口癖だったようです。そんな歌の一つ、ふるさとの刈り入れの情景を描いた『藁のにおい』を聴きました。

もう一つ、笠木さんが大切にしていたことは、「弱い者の立場にたって歌うこと」でした。『あざみの歌』では、♪弱くたっていいじゃないか・・♪と、弱者を励まします。

さらに笠木さんは、「歌ったように生きなさい。表現したことと、自分の生き方が違ってはいけない」と何度も語ったそうです。「理想を表現することは、現実を理想に近づけていくこと。憲法9条もそう。私たちは、文化で闘っていくしかない。この思いを次の世代に伝えていくことが大切」と。

『ペンペン草』。これは沖縄の人たちの戦いを励ます歌です。「♪ペンペン草よ 鳴らせ鳴らせ空に向かって サンシンを鳴らせ ペンペン・・ペンペン草よ 歌え歌え 弱い者たちの勇気を歌え♪」。参加者は増田さんに誘われ、「♪ペペーン ペんぺんぺん・・♪」と元気よく声を合わせました。

祝島の上関原発に反対するおばあちゃんたちの唄った歌『豊かな青い海』、反戦僧侶・竹中彰元を唄った『竹中彰元さんの歌』の紹介もありました。

増田さんの歌とトークを聞いて、参加者一人ひとりが笠木さんの思い出や、感想を述べました。

「30年前、長良川反核のつどいで、初めて笠木さんの歌を聴いた」「今日は、歌だけでなく、トークがありよかった。運動を拡げていこうと思えば、新しい人に目を向けていくべき。運動していく側にこそ、想像力が必要」「『わが大地のうた』がきっかけで笠木さんを知った」「『藁のにおい』で子どもときの畑の手伝いを思い出した」「宇高連絡船の中で『私の子どもたちへ』が流れていた」「You Tubeでたくさん流れている。すばらしい。歌の力はすごい」「増田さんのギターと歌にしびれた」「『長良川』で山椒魚、伊勢湾台風のことを思い出した」「笠木さんの名前は知っていたが、歌を聴いたのははじめて。とても印象に残った。鉢巻をしめて歌うような歌とちがって誰でも入っていける歌。感動した」「笠木さんが車椅子で歌われた姿が印象に残っている」「笠木さんは、自分の歌を持っているか？自分なりの人生の指針をもっているか？ そんなことを考えさせる文化を私たちに残してくれた」など、など。

最後に増田さんは「笠木透は型破りの人だった。それぞれの人がその人なりに捉える笠木透であってほしい」としめくくられました。